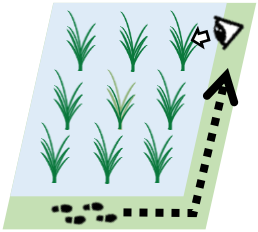
イネ縞葉枯病の調査方法（分げつ期）

作成：滋賀県病害虫防除所

□概要：見取り調査で縞葉枯病の発病の有無を調査し、発病株率を記録する。

□調査方法



・時期： 6 月 20 日を基準に前後 5 日間程度

・方法：ほ場の畦畔を歩き、畦畔から見える範囲の株を観察する。およそ 200 株（それ以上でも良い）を観察して縞葉枯病の発病株数を記録し、発病株率（%）を求める。発病がみられた株を「発病あり」とし、発病した葉数は記録しなくてよい。記録は 1 筆ごとに行う。

・発病株率が 1%を超えていた場合、ヒメトビウンカの本田防除を検討する。

・縞葉枯病が発病した株は、周囲のヒメトビウンカにウイルスを広げる原因となる。発病株を抜き取ると、感染拡大の予防になる。

□縞葉枯病の見分け（別添の画像も参照ください）

・分げつ期の発病は、以下の 2 パターンに大別される。

①生育初期に感染すると、葉がねじれて垂れ下がり、展開せずに徒長する。葉鞘は緑色のままである。 1 株に複数発病している場合が多い。いわゆる“ゆうれい症状”。

②比較的遅い時期に感染すると、葉脈方向に沿って黄色～白色に退色する（縞状になる）。

・間違えやすい病害虫は主に 2 種類ある。

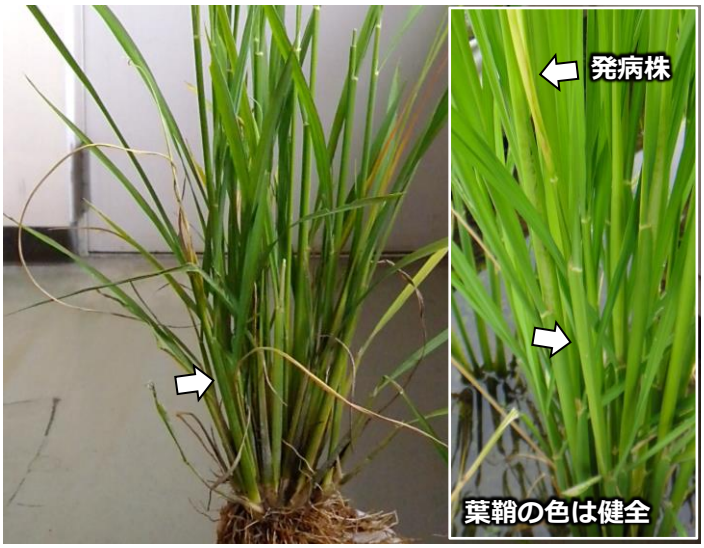
Ⅰニカメイガ：葉が黄色～褐色に枯れる。株元のみが黄色くなり、葉先は緑色のままのこともある。ニカメイガは株元の葉鞘が黄色くなるのに対して、縞葉枯病は株元の葉鞘は緑色のままである点で異なる。抜き取って観察した際、葉鞘内に幼虫がいる、もしくは脱出後で幼虫がいた空洞やフンが残っていることでも見分けられる。

Ⅱイネクロカメムシ：吸汁によって葉先が枯れる。葉の真ん中あたりから上が枯れるが、縞葉枯病は葉鞘の上部すぐから症状が出るという点で異なる。

イネ縞葉枯病

・複数の葉がねじれ、展開せずに垂れ下がる。縞状に退色した症状も混在している。
・複数の茎で発病しているため、株全体の生育が悪い。

・葉脈方向に沿って黄色～白色に退色する。



・発病した茎の葉鞘は健全な色をしている。まれにわずかに退色するが、褐変はしない。
（ニカメイガでは葉鞘が黄色～褐色になる。）

縞葉枯病に似た被害の病害虫

ニカメイガ

・縞葉枯病の“ゆうれい症状”に似るが、株元の葉鞘が黄色～褐色になっている点が異なる。

←葉は縞状にならず、全体が黄色く変色する。

↑葉鞘内に幼虫がいる、
もしくは、食い荒らした空洞やフンが残っている。

イネクロカメムシ

・葉の真ん中～葉先にかけて枯れる。
葉全体が“ゆうれい症状”になることはなく、
葉先が枯れた葉も下半分は健全な色をしている。